



**ウェン**  
【住所】 東京都千代田区東神田 2-8-7 エスポワール東神田 4F  
【Mail】 when@s-when.com  
【営業】 完全予約制  
【HP】 https://www.s-when.com

緊急事態宣言は解除されたものの、まだまだ街に活気が戻ってはいなかった7月、東京・青山の「フリフトアッシュ」の店頭には、見慣れないいくつかの靴が並んでいた。軽量ヴァイブルソールのホールカット、Tストラップシューズ……クラシックなドレスシューズのスタイルとは一線を画しつつ、つくりなどは明らかにハンドメイドの、職人性を感じさせるものだった。それらは靴職人・小林晃太氏のブランド「When（ウエン）」がスタートした、MTOのサンブルシューズだった。その靴は、ニューシャインというクラシックなサービスを提供しながらも、どこか若々しさがある「フリフトアッシュ」の雰囲気によく合っていた。

そして10月、東神田の一角。マスクをした身にはちよっときつさも感じる4階までの階段を上りきり、ドアを開けると、明るい光が射し込む



空間が広がった。窓からは神田川が見下ろせる。

「7月に引越してきました。この光がいいなと。ここならお客様にもいらしていただけたらと思うって」

このように語る小林氏。このアトリエは彼と、彼の公私にわたるパートナーである小林実咲氏が共同で使っている。実咲氏も靴職人で、アッパーの縫製を行うクローザー。そしてふたりとも一見して若い。

小林氏が靴づくりの道に進もうと思ったのは、高校時代だったという。地元長野の須坂市にあるセレクトショップで、「Homme（フォルメ）」の靴に出会ったのだ。程なくして「フォルメ」のデザイナーである小島明洋氏に会いに行きたというから、小林氏の行動力が窺える。

「その後で結局『フォルメ』の靴は自分で買うのですが、当時靴欲しさもあって、小島さんのところで靴づくりをしますと宣言したら、エスペランサ靴学院を紹介してもらって」

エスペランサでは2年間学んだが、実は小林氏は卒業していない。彼の卒業制作は不認定になってしまったのだ。

「ロシアが2014年5月に人類を完全に電脳化しようとしているという話を聞きつけて、電脳化した人類が光速で動けるようになったら、その時自分はどんな靴をつくれるかをテーマに、光を靴としてまとっているようなCG画像を作成したんです」

実に野心的な作品だが、靴づくりの技術点がなかった。もう1年在籍する話もあったが、自分の表現

1 小林氏が靴づくりの道に進むきっかけとなった「フォルメ」の靴。毎日のように履いてボロボロになったため、いたるところパッチをあてて修理している。ちなみにブランド名「When」は、小島氏のアトリエに写真が貼られていたヴィンセント・ギャロのアルバム名から着想されたそう。2 小林氏のベンチ。窓の下には神田川が流れる。3 パートナーである小林実咲氏がエスペランサ靴学院卒業制作でつくった、アッパーに刺繍をあしらったブーツ。現在工房ではこうした刺繍を使ったレディースシューズも手がけているという。4 アッパーのクロージングの作業を行う実咲氏。「When」のアッパーはもちろん、外部職人として、いくつかのブランドや靴店のアッパーを手がけている。



New Shoemakers & Crafts #2 When



ESSENTIAL ELEGANCE  
**When** New Shoemakers & Crafts #2  
ウェン

クラシックなだけではない、現代の靴を求めて。

日本人デザイナーの靴との邂逅から、靴づくりを志した若者は父譲りの独立心を持ち、さまざまに吸収しながらオリジナルな存在感の靴を目指す。

白石和弘 | 写真 photographs\_Kazuhiro Shiraishi  
 菅原幸裕 | 文 text\_Yukihiro Sugawara

アトリエにて、靴づくりの作業をする小林晃太氏。壁面に架かっているのは、アルメニアの画家ジャン・ジャンセンのリトグラフ。長野・安曇野に美術館があり、そこで出会ったという。アトリエ内には随所にジャンセンの作品が。



New  
Shoemakers  
& Crafts  
#2  
When

9 ホールカットのスタイルに、ヴィブラムのラバーソールを組み合わせたMTOのデザインサンプル。穴の間隔が狭いレース部のバランスがユニークだ。シューレースはグログラン風のものを選んでる。10 小林氏も気に入っているというMTOのデザインサンプル。アッパーに使っている革はアメリカンパイソン。トップラインやレースステイにはパイピングが配されている。11 「プリフトアッシュ」での受注会で人気の高かったTストラップのMTOデザインサンプル。MTOは¥130,000〜、九分仕立て。納期は2〜3ヶ月（状況により変動あり）。



9



6



5

を認めてもらえず残るわけにはいかない、そのままに。その後「フォルメ」小島氏のところも訪ねたが、空きはなかった。半年ほどアルバイトをしながら靴づくりをしていたところ、父親から名刺をつくるように言われたという。

「父は長野で会社経営をしているのですが、20歳で起業したんです。それを知っていたので、私も早くから自分自身でやってみようと思っていました。父の知人の経営者の方を紹介してもらい、靴をつくったのが、最初の仕事です」

紹介で知己を得た経営者たちは、気軽にオーダーメイドする余裕がある一方で、必ずしも靴好きというわけではない。多くの場合顧客の意向を聞きつつ、こういう靴がいいのではと提案することが求められた。また、ハンドソーンの靴づくりはエスペランサ時代に村田英治氏から教わった数値やつくり方、同じく学校で学んだかみ式などをベースとしていたが、顧客からのフィードバックに関するフィードバックは少なく、手探りで悩みながら進めていたという。

『KOKON』との出会い  
そして次のステップへ。

小林氏は、毎月浅草で行われる、同店の靴をつくっている職人たちの会合に参加するようになった。そこで高野圭太郎氏や常世田哲氏といった靴職人と知遇を得たのだ。

「やり方を教わることはないですが、こうすればいいんじゃない、といったアドバイスはいただきました。もっとも高野さんや常世田さんと話してみても、一番の収穫は、答えがないということがわかったことかもしれない。それまで数値を使った靴づくりならば、正解のようなものがあると思って悩んでいました。でも結局人それぞれなんです」

やがて小紺氏にも評価され、『ココン』にて小林氏がつくった「KOKON-1」という木型を使った靴を展開するようになった。それは冒頭で紹介した、MTOの靴づくりへと繋がっていく。

『ココン』ではアーチサポートがしっかりとした木型が評価されました。今回のMTOはそれとはまた違うアプローチで、土踏まずの挟りや、甲の立ち上がりなどを緩やかにしています」

そうした木型で小林氏が目指すのは、「履いたら背筋がピンとするのではなくて、楽になったり、落ち着いたりする靴」という。独特なスタイルの提案も、そのコンセプトから導かれたものだ。

「玄関先に立ったときに、やっぱりこれでいこうかなと思える靴、そういうものを目指しています」



11



10



8



7

5 ミシンなどが置かれた古川氏の作業スペース。奥にはラストのラックも見える。6 こちらはビスポークのサンプル。シンプルなタッセルスリッポン。ビスポークは¥250,000〜、仮縫いは基本2回、納期は6〜8ヶ月（状況により変動あり）。シューツリーは別売り（¥30,000）。7 MTOの発注の際に履くサイズゲージの靴。これを履いてサイズを確認して発注する。8 MTOのオーダーで使うアッパーの革のスイッチ（見本）。エッジパイピングの色見本もあるのがわかりやすい。